

ブエノスアイレスとアンデス高原の旅

立 脇 徳 松

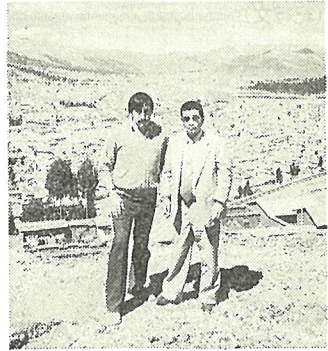
一九八六年八月、ボストンでの国際乾燥工学シンポジウムに参加の後、ニューヨークのケネディ空港のアルゼンチン国営航空ターミナルに行った。搭乗ロビーの騒々しい雰囲気は、とてもアメリカとは思えず、スペインに在るように錯覚しそうであった。五百人近い乗客のほとんどがスペイン系であり、アジア系としてはインド人二人と私だけのようであった。十時間飛行して、早朝にブエノスアイレス空港に着くと、知人のゴンサレス夫妻と息子さんが、日章旗とアルゼンチン国旗を振りかざしながら飛び出してきて、私に抱きついた。出迎えを予想してなかったのと、大勢の人前での派手な歓迎なのでびっくりした。つづいて、三十歳位の日本女性が来て、ゴンサレス氏が通訳の幹旋を日本大使館に頼み、彼女が三日間雇われたこと、また、バン・アメリカン・ホテルへのチェックインも既に済ませてきたので、このまま観光案内に行ける、と挨拶された。何ということか、大名旅行である。

ブエノスアイレスは南米のバリとも呼ばれる美しい大都会である。目抜き通りの中

央にオリベスクが建っている様子は、なるほど、パリに似ていた。市民のほとんどがスペイン系であり、イタリア系と合わせて八割ぐらいの感じであった。一割強が混血（ガウチョ）、残り一割弱がアジア系のようなのであるが、黒人と日本人はめったに見かけなかった。街の人々は、少数の富裕階級と大多数の庶民に分かれているようであったが、乞食等は見かけなかった。富裕階級の



ゴンサレス一家と日本庭園造営予定地にて



オスカル氏とタスコを展望

女性達は、そんなに寒くないのに、毛皮のコートを着ていた。私を観光案内する際は、ゴンサレス氏と息子さんは案内役ではなく、私と夫人達の前後を歩いて、用人棒をつとめる。やはり、危険な街なのである。息子さんの車はフランス製のブジョーであるが、カーラジオはない。カーラジオは一年間に八回も盗まれたので、息子さんは乗車する度に、上着のポケットのソニーのウォークマンを車のスピーカーにつなぐのである。お恥しい国なのです、と笑っていた。

ゴンサレス氏が経営している段ボール製造工場は郊外にあり、五千坪程であったが、コンクリート塀の高さは三メートルもある。

クラクションの合図で、内側から混血の青年が門扉を開けるが、戦車でも持って来なければ突破出来ないような頑丈な造りであった。工場長のイタリア人以外は、事務職にはスペイン系が多く、現業員には混血が多かった。

在留邦人に会いたいと言うと、生花市場に連れてくれた。日本人が多く、菊を「キク」と呼ぶのだと説明してくれたが、私は嬉しくなかった。この国は、日本人以外の有色人種の入植を認めず、例外の日本人にも、土地の所有を容易には認めなかったため、仕方なく、小資本でも出来る花屋や洗濯屋になった。この悲しい歴史を私は知っていたのである。チノ(中国)、コリア(朝鮮)、ハボン(日本)とも、最近までは、一人前には扱われていなかったようである。

翌日は、市内の観光名所になっている墓地に案内された。この墓地は、石造の塀に囲まれた一万坪程の広さであり、御影石や大理石で造られた十坪ぐらいの建物が三百軒ほど並んでいる。どれも、教会のような形をしており、地下が棺置場、一階が祭壇であり、鉄格子のドア越しに見えるように



インゲン豆の脱穀

なっている。一軒が数千万円から数億円するらしい。アルゼンチン人の夢は成功してここに墓を持つことであるという。富豪や名家の人々は、日曜日には家族連れで墓に参り、帰りの際に、門前に五軒ある高級レストランで昼食をとるのが最高の楽しみであり、ステータス・シンボルであるという。当然、庶民の墓はないが、唯一の例外は、正義党がカンパして建てたペロン元大統領

の墓であった。ゴンサレス氏は、自分達の墓はないが、門前の高級レストランで昼食をとるぐらいのお金は持っている、と笑って散財してくれた。

三日目は、イタリア人の多いボカ地区へ行った。昔は、スペイン、イタリア、イギリス船の船着場であり、酒場や売春宿や賭博場で栄え、アルゼンチン・タンゴもここで生まれた。サッカーの名手マラドーナの、かつての本拠地であるボカ競技場にも行った。この競技場はこの近辺の青少年の唯一の希望の灯のようである。カミニートでは、絵画が露天で売られていたが、小規模で、モンパルナスとは比較にならない。入江は廃船置場になっていた。名物のエビ料理を御馳走になったが、レストランの豪華さと街の寂しさが、どうにも不釣り合であった。

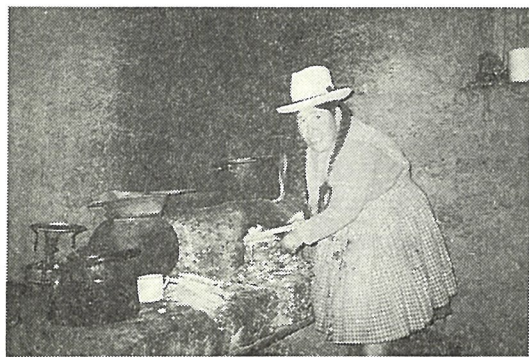
次の日、ペルーのリマに行くための出国検査の際に、私がカバンに入れていた銃が摘発され、武器と見なして没収すると言う。散髪用だと主張しても聞き入れてくれない。ゲートに向わない私を心配して、ゴンサレス氏等が殺し、管理官や兵士に激しく詰寄ったので、彼等はたじろいで、銃の携帯

を認めた。

六時間の飛行後、真夜中にリマ空港に着いた。空港には旅行社の竹島さんの出迎えがあり、混血(チヨロ)の青年が運転する車で市内に入ったが、リマには戒厳令が出ており、夜間外出禁止なので、路上で何回も軍隊に検問された。翌朝、クスコに向けて出発した。

クスコ空港には旅行社の梅野氏、ケチュア語の通訳兼運転手のオスカル氏とその姉さんが出迎えてくれた。「シガー」と私につきまとう少年少女、スートケースを受け取ろうとするポーター、「タキ、タキ」と叫びながら近寄ってくるタクシীর客引等で、大変な騒々しさである。昼食のため食堂に入ったが、私の注文が済むと彼等は退席した。何故かと聞くと、「客と同席して食事することはガイド仲間の掟に反します。自分達の昼食代金も契約で既に頂いています」と固辞した。食事を始めようとすると、ガラス窓越しに子供の顔が二つ現われ、じっと私を見つめている。胸がつかえて食物が喉を通らない。入って来い、と手招きすると、恐る恐る入って来て、タバコを買っ

てほしい、と言う。梅野氏が店内に来て、タバコを買うのを手伝ってくれた。この国の紙幣は額面の数字の桁が多くて、価値の見当がつかないのである。食堂を出ると、今度は、五歳ぐらいの裸足の少女につかまされた。「セニョール、シガレット」と言っていて、汗で黄ばんだタバコを一本差し出して、私を見つめた。私の足は地面にひっついてしまった。梅野氏に相談すると、キャンデ



チューニョを煮るプーマ夫人

ーをプレゼントしたら、と言ったので、買
いに行ってもらうと、二ドルで三百個もあ
った。ペルーの国民一人当りの年収は約一
万円(日本は約百二十五万円)である。物価
は日本の十分の一、消費生活のレベルも日
本の十分の一ぐらいの感じで、昭和二十一
年頃の日本の状態のように思った。南米を
無茶苦茶にしたスペイン人の罪の大きさに
憤りを感じた。

クスコには、ネバールのカトマンズを追
われた日本人ヒッピーが数人いたが、彼等
に前歯がないことに気付き、理由を尋ねる
と、コカ茶にやられたのだと言う。インデ
イオはコカの葉をしごんだり、コカ茶にし
て飲む。私もホテルがサービスしてくれた
コカ茶を飲んだが、ウーロンのような味で
あった。このコカ茶の葉を南米の北部の国
で精製してコカインとし、カリブ海を渡っ
て米国に密輸される。これがマイアミ・コ
ネクションと呼ばれているのは周知の事実
である。

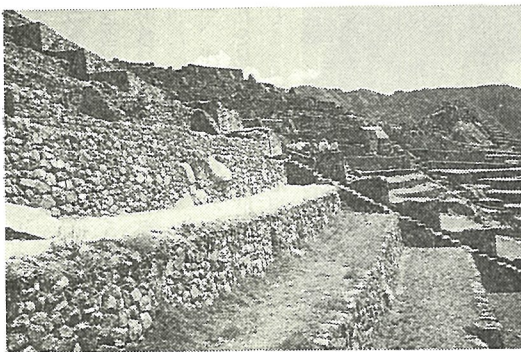
私のアンデス訪問の主目的である乾燥ジ
ヤガイモ作りの見学に行った。梅野氏、オ
スカル氏と三人で車でクスコを出発した。

二十キロ程行くと、水溜りで洗濯している
二人のインディオ女性を見かけ、写真撮影
の交渉をすると、百円程の謝礼を要求され、
オスカル氏は激怒したが、約五十円を出す
ことにした。さらに十キロ程の所で、凍結
乾燥ジャガイモであるチュニニョを干して
ある農家を見つけ、このブーマ宅で、チュ
ニニョの作り方と食べ方を実演してもらっ
た。モラヤと呼ばれる高級凍結乾燥ジャガ
イモの製造法の見学は、時季が過ぎていた
ので、奥地への探索は断念した。

インディオの祖先はシペリアのバイカル
湖畔の北方系蒙古族のブリヤート族なので
日本人の祖先と全く同じらしい。体格、体
型、顔立ち、動作は日本人そっくりであり
感情の動きも似ているように思った。

三日目は、梅野氏の案内で、片道三時間
の列車でマチュピチ遺蹟に行った。列車は
四輦連結のディーゼル車であり、各車輦に
はゲリラ対策用に兵士が二人ずつ警乗して
いる。乗客の半分程はアメリカ人観光客、
四分の一程は若い女性の集団を主とする日
本人観光客であった。クスコを出発して間
もなく、列車は山に登るのであるが、七回

のジグザグの折り返し走行、つまり、最前
列と最後列の車輦が交互に牽引車となって
登るのである。やがて、アマゾン源流であ
る小川が見えた。「ペルーくんだり」と呼ば
れる悲しい歴史の現場である。大正の初め、
ペルーに來た日本人移民は、雪のアンデス
高原を裸足で越えて、ボリビアへの逃亡を
企て、飢餓と病苦のために、その大多数が
亡くなったのである。



マチュピチ遺蹟

マチュピチ遺蹟は、今世紀に入ってから発見された用途不明の石造の街で、謎の空中都市と呼ばれている。インカの宗教関係の遺蹟なのか、スペイン人への反撃の砦なのか、処女館なのか、今も謎のままであると言う。マチュピチ遺蹟の帰りは、鉄道駅までバスで下りるが、急坂なので、ジグザグさせた道である。バスの発車と同時に一人の少年が真直な近道を駆け下り、交叉す

るバスに「グッドバイ」と叫び、再び駆け下りるのを繰り返しながら、鉄道駅までバスと競走する。バスを下りると、汗だくの少年が待っているの、チップを渡して少年の労をねぎらう。

下らねばならないが、深夜なので実行できない。アスピリン、利尿剤、睡眠薬を飲んで耐えた。

翌日、リマに帰り、天野美術館、日本ベール文化会館等を見学した。在留邦人の活躍が目覚しく、嬉しく思った。同宿となった日本領事さんや海外技術援助隊員さんとの夕食会も楽しい思い出である。

(大学工学部専任講師)

新島襄関係文献 (抄)

「新島襄全集」全十巻 (刊行中)	同 朋 社 出版
A. S. HARDY, LIFE AND LETTERS OF JOSEPH H. NESIMA	同志社大学出版部
「同志社設立の始末・同志社大学設立の旨意」口語改記並原文」	同 志 社
森中章光編「新島先生書簡集」正・続	同 志 社
同志社編「新島襄書簡集」一岩波文庫	岩 波 書 店
J. D. デイヴィス著・北垣宗治訳「新島襄の生涯」	小 学 館
「新島先生記念集」	同志社校友会
「明治文学全集」第四十六巻—新島・植村・清沢・綱島集—	筑 摩 書 房
J. D. DAVIS, JOSEPH HARDY NESIMA	同 志 社
森中章編著「新島襄片鱗集」	丁 字 屋 書 店
永澤嘉巳男編「新島八重子回想録」	同志社・同志社校友会
徳富蘇峰著「新島襄先生」	同志社大学出版部
魚木忠一著「新島襄—人と思想」	同志社大学出版部
岡本清一著「新島襄」	同志社大学出版部
渡辺実著「新島襄」	同志社大学出版部
同志社社編	吉 川 弘 文 館
「同志社百年史 通史編 I・II」	同 志 社
「同志社百年史 資料編 I・II」	同 志 社
和田洋一著「新島襄」	日本基督教団出版局
同志社社史資料室編「追悼集 I・II」	同志社社史資料室
雑誌「新島研究」	同志社新島研究会